The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性差の揺らぎ : ロレンスの『狐』を読む
Author(s)	内田, 憲男
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 69-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

性差の揺らぎ
―ロレンスの『狐』を読む―

内　田　憲　男

『狐』を読んでその読後感を述べようとするとき、多くの読者はある種の戸惑いを覚えるのではないだろうか。色んなことを読み取ったという確かな実感はあるのだが、自分が得たその実感を過不足なく自分以外の読者に伝えようとすると、何をまず優先させて述べればそのテクストの肌理をもっともよく伝達できることになるのか、なかなか判断がつかない、そういった思いにとらわれるのではないだろうか。『狐』のテクストがもつこのような特異な性質について、ある批評家は、「どんなに解釈間の比較考量を試みてもひとつの正しい解釈にいたることができず、同じような妥当性をもつようにみえる複数の解釈が互いに相譲ることなく併立してしまう……D・H・ロレンスの中編小説『狐』をめぐって生じている事態がまさしくこれなのだ。」と述べ、また別の批評家は、文学テクストを芯のない玉葱に喩えたR・バルトを引いて、「『狐』はこれまですでに玉葱のように皮を剥かれてきたが、この動物の皮は依然として謎めいたままなのである。」と述べているが[1]、いずれも『狐』というテクストの本質を突いた卓見と言うべきであろう。最近の文学理論で用いられる批評用語を使えば、テクスト解釈の〈決定不可能性〉(indeterminacy)を地でいくような小説、それが『狐』であると言ってもよい。本稿は、そのように多種多様な解釈がなされ得る[2]この中編小説について、性差（ジェンダー）の観点から筆者なりに考察を加えてみたものである。

ストーリー自体は陳腐なメロドラマ仕立てと言ってもおかしくない。第一次大戦直後の１９１８年の終わりに、そのときまでにすでに２年ほど人里離

れた場所で二人きりで家禽農場を営んできた、ともに三十歳近い女性の所へ、二十歳前の一人の若い兵士が訪れ、一晩泊めてもらうだけだったのが、そのまま数日滞在することになり、その間に女性の一人に求婚することになる。パートナーの女性はそのことに激しく嫉妬し、彼女に結婚を思いとどまらせようとするが、二人は登記所で婚約を済ませ、クリスマスに結婚する手はずをつけて、兵士は駐屯地に戻っていく。ところが、青年が去ったあと、当の女性は自分が取った行動を「狂気じみた」振る舞いであったとして、彼に謝罪の手紙を書く。それを読んだ青年は、結婚の障害になっているのは彼女のパートナーに違いないと直感し、この「とげ」を取り除くべく、即刻休暇を願い出て農場に舞い戻り、彼の心奥にある意志が引き起こすというほかない殺害行為[3]によって、自分の思いを遂げる。

このように要約してみれば、いささか後味の悪いラヴ・ロマンスの一編にすぎないように思われるかもしれない。なぜ、このような作品に多種多様な解釈が試みられてきたのかと訝しく思われるかもしれない。しかし、女主人公エレン（ネリー）・マーチと青年ヘンリー・グレンフェルの結婚へと至る物語をそもそも生起させる、マーチの雄狐との出会いの場面の描写を読めば、この中編小説が一筋縄ではいかない、不思議な、吟味するに値するテクストであることが分かって頂けるだろう。

> 彼女が視線を下方に向けると、突然、狐の姿が眼に入った。彼は彼女を見上げていた。あごを引いていたが、彼の眼は見上げていた。その眼が彼女の眼と出会った。そして彼は彼女を知った。彼女は呪文で縛られたようになった。彼女は彼が彼女を知ったことを知った。すると、彼が彼女の眼を覗き込んだので、彼女の魂は萎えてしまった。彼は彼女を知った、そして怯まなかった。

「知る」(know)という動詞がこの上なく意味ありげに使われているこの一節について、聖書における‘know’の用法に言及して、「狐がマーチという女を、

ではなくて、彼が彼女を知る。この超越的な場で起きているのは、間違いなく、性の交わりである。」と興味深い、うがった解釈をする批評もある[4]。しかし、筆者はここはやはり「狐がマーチを知った」と文字通りに解するにとどめ、そして、狐は彼女の何を知ったのか、いやむしろ、彼女は何を狐に知られてしまったのか、と問い掛けたいと思う。

マーチは何を狐に知られてしまったのか。それは彼女自身のなかで眠らされていた女性性にほかならないと断定すれば、あまりにも唐突な物言いになってしまうだろうか。いや、『狐』の作者ははっきりとそのように解釈されるようにテクストを仕組んでいると思われるのである。というのも、この場面に至る冒頭からの数ページは、マーチとジル・バンフォードという女性二人きりの農場生活の状況を説明するものであるが、そこでとりわけ読者に強く印象づけられるのがマーチの男性性だからである。「小柄で、痩せていて、病弱な」バンフォードに対して、大工仕事の心得もある「たくましい」身体つきのマーチは、「この家での男の役割」を求められている——「外回りの仕事のほとんどはマーチがやった。巻ゲートルに半ズボン、ベルトの付いた上着に縁なし帽といった装いで、外で立ち働いているときの彼女は……優美な青年のようにさえ見えた。」しかし同時にまた、その「男の役割」が必ずしもマーチにしっくりとは適合していないことを示唆するかのように、作者＝語り手は、「しかし彼女の顔は男性の顔ではなかった、絶対に。」と強調し、また女性らしい豊かな髪の毛や眼の表情に触れたあと、「彼女の口元もまた、まるで苦痛と皮肉を感じているかのように、引きつっているようだった。彼女にはどこか奇妙で不可解なところがあった。」と書いているのである。いや、マーチに「男の役割」が十分には務まらないということなら、農場を始めた最初の頃にいた二頭の若い雌牛を手に負えなくなって売り払ってしまった事実が何よりの証拠だろう——「マーチがどんなふうに柵をこしらえても、雌牛は外へ出て、森を駆け回ったり、隣の牧草地に侵入した……それでどうしようもなくなってこの雌牛は売り払われた。また、もう一頭は初めての子を産む直前になって、（バンフォードの）祖父が死んでしまったの

で、女たちはこれから生じる事態を恐れ、あわてふためいて売り払ってしまった。」

こういった語りと描写は、マーチの男性性が強いられたもの、いや、彼女がバンフォードとの生活において自らに強制したものであることを示唆しているように思われる。語り手がマーチの顕著な特徴、「彼女のいつもの状態」として度々読者に注意を促す、「奇妙な、何かに心を奪われた状態」は、日常の生活において「仕事の5分の4」を果たす、すなわち意識的に「男の役割」を引き受けていることが、マーチにとってきわめて苛酷な任務であることを示唆している。したがってそうしたマーチの「放心状態」は、「休息する暇のない」彼女にとって、しばしの安らぎの時間なのである。そして狐がマーチを「知る」のは、まさにそのような瞬間である。先の引用の直前には以下のような文章が記されている。

> 彼女は［周囲の情景を］眺めていた。すべてを見ていたが、何も見ていなかった。バンフォードが遠くの方で家禽に声をかけているのが聞こえた――が、彼女には聞こえなかった。彼女は何を考えていたのか。誰も知らない。彼女の意識は、いわば、抑え込まれていた。

「知る」という言葉にこだわるなら、先の引用は、狐が「誰も知らない」マーチの思い、すなわち彼女の心のなかに潜在する何かを「知った」のであり、さらに、マーチがそのことを「知った」ということは、彼女が己れの意識下に存在する何ものかに気づかされたということを意味している。このエピファニー的な場面が伝えているのは、雄狐（＝「彼」）の眼差しによる、日常生活において「抑え込まれていた」マーチ自身の女性性の覚醒にほかならない、と言い切ってもいいだろう。

さらに、この雄狐との出会いをマーチがその無意識において望ましいものとして受けとめたことも間違いない。なぜなら、このときを境にして、家禽を食い荒らすベイリー農場の最悪の敵、マーチとバンフォードにとっては撃

ち殺すべき「悪魔」であるはずの雄狐が、魅惑的な存在としてマーチの心のなかにはっきりと場所を占めてしまうからである。

> ……地面に落ちている木の枝をゆっくりと飛び越え……、ふと肩ごしにちらっと視線をやって、しなやかに狐は走り去った。羽毛のようになめらかな尾をもち上げた狐の白い尻がきらめいたのが彼女の眼に映った。柔らかな風のように、やさしく彼は去っていった。

その後もマーチは銃を携えて狐を探しに出かけて行くが、それはもはや以前のように家禽を奪う害獣を見張るためというのではなく、「狐がそれとは分からないままに自分の魂を支配していると感じた」という一文が示しているように、「彼女が彼に取り憑かれてしまった」からである――「血のように赤い空を背景にした松の木の黒い梢を眼にすると、また彼女の心臓は動悸を打って狐に、狐へと向かうのであった。彼のあとを追いかけたくなるのだった、銃を携えて。」

俗に「悪魔のような恋人」という言い回しがあるが、マーチの「眼を覗き込んだ」雄狐は文字通りそのような存在になってしまう。そうであってみれば、バンフォードと彼女との関係がレズビアンであるかどうかはともかく、彼女が雄狐との出会いをバンフォードに言葉少なく、しかも数日後に語るのも不自然ではない。

> 「残念だわ、あなたが彼を撃たなかったのは。」とバンフォードは言った。
>
> 「まったく残念なことをしたわ。あれからずっと彼を探しているのよ。でも、もうあんなに近くに来ることはないと思う。」

小説を読む楽しみに登場人物の会話の面白さがあるが、ここもそのひとつである。マーチの言葉に、突然出現した新しい恋人を恋い慕う思いが潜んでい

るなどと考えるのは邪推というものであろうか。彼女はパートナーの気持ちを悟ったかのように、このあと狐との出来事を「忘れようとし始める」。だが、例の「なかば瞑想するような、なかば恍惚とした状態に陥るとき」、「彼女の無意識をなぜか支配するのは、やはり狐なのである」。

> こうして数か月が経った。森の方へ出かけて行くとき、彼女は今もなお無意識に彼を探し求めた。彼は彼女の魂のなかに定着したひとつの印象、永久に確立したひとつの状態となって……いつも心に浮かんでくるのだった。自分が何を感じ、何を思っているのかは分からなかった――ただ、彼が彼女を見つめた時のあの状態が彼女を襲ってくるのだった。

こうしてマーチの無意識のなかに、いわば、狐が住み着いた時点で、若い兵士ヘンリー・グレンフェルが登場し、マーチはたちまち「彼の不思議な、柔らかな、抑揚のある声」に魅了され、「呪文で縛られた」ようになってしまう。このヘンリーの突然の来訪の場面で、語り手は「柔らかな」(soft) をはじめとして様々な形容語句を用いて、ヘンリーと狐との類似性を示唆しているのであるが、それよりも、マーチが即座にヘンリーを狐に同一化してしまうという事実それ自体に注目しなければならない――「青年は彼女にとって狐であった、彼女は彼をそのほかのものと見ることはできなかった。」なぜ、マーチの心のなかでそのようにいとも容易に人間と動物の同一化が生じてしまうのか。

> 彼［ヘンリー］は狐と同一化された――彼が全身を現わしてそこにいた。もはや彼を追い求める必要はなかった。片隅の物陰のなかで、自分にかけられた呪文を受け入れて、彼女はほとんど眠っているような、温かな、くつろいだ安らぎに身を委ねていた。しかし彼女は隠れたままでいたいと思った。完全に安らかでいられるのは、彼がバンフォード

に話しかけていて彼女を忘れている間だけだった。片隅の物陰のなかに隠れていれば、二つの意識のレヴェルを維持しようとして、自分自身が分裂することも、もはやその必要がなかった。ついに彼女は狐の匂いのなかに溺れこむことができた。

この引用は、マーチが日々「二つの意識のレヴェル」、農場の仕事すなわち「男の役割」を果たさなければならないという意識と、「安らぎ」の得られる「放心状態」における意識（＝無意識）とに引き裂かれているという事実を明示するとともに、彼女がヘンリーを狐と同一化する動因が、彼女自身の無意識の欲望、すなわちあの雄狐が支配する意識のレヴェルにいつづけたいという彼女自身の欲望にほかならないことを示している。ただここで見落としてならならないのは、彼女が部屋の片隅で「隠れたまま」でいるときのみ、またヘンリーが「彼女を忘れている間だけ」、その完全な同一化が可能になっていることである。「[ヘンリー] の存在が彼女にこのくつろいだ安らぎをもたらすのだが、彼を一人の男性として認めることは、彼女の心をかき乱す。……彼が彼女に安らぎをもたらすのは、彼女が彼を狐と考えられる間だけなのである。」[5] つまり、マーチにとって大切なのは、あくまでも狐であってヘンリーではないということである。換言すれば、少なくともこの時点においては、ヘンリーという青年は、雄狐と同一化されることによってマーチの雄狐との関係をさらに深化させる点においてこそ、何よりもその存在意義が認められるということである。

この若い兵士が来訪した夜にマーチが見る夢は、雄狐が彼女にとってどういう存在であるかを読者により明確に伝えるために作者＝語り手が仕組んだものと考えられる。

その夜マーチは鮮明な夢を見た。夢のなかで彼女は戸外でなにか分からない歌声がするのを聞いた。その歌声は家の周りを、牧草地を、暗闇のなかを漂っていた。彼女はひどく心を動かされて、きっと自分は

泣きだすに違いないと思った。戸外に出た、すると突然それが狐の歌声であることを知った。狐はまるで小麦のように鮮やかな明るい黄色だった。彼女は彼に近づいていった。すると狐は走り去り、歌うのをやめた。近くにいるように思えたので、彼女は触ってみたくなった。片手をのばしてみた。すると狐は突然彼女の手首に噛みつき、彼女が怯むのと同時に、跳びはねて逃げるようにくるっと向きを変えたが、その瞬間、尻尾で彼女の口をはたいた。その尻尾には火がついていたのか、彼女の口は焼け焦げ、燃え上がり、ひどく痛かった。目が覚めたときも、その痛みが残っていて、彼女はまるで本当に焼け焦がされたかのように、ぶるぶる震えながら横たわっていた。

「ロレンスの『狐』における苦く甘い夢」という優れたフロイト的批評を書いたL・グライフは、マーチが見るこの夢のなかの狐の姿は、実在の雄狐とヘンリー・グレンフェルが「凝縮」(condensation)されたものであり、また、「まるで小麦のように」という直喩は、「受精を含意するがゆえに、そもそも夢見ることへマーチを駆り立てたのは性的な動機であったことを示している」と述べ、さらに、狐の尻尾とマーチの口との、後者に激しい痛みを残す接触を「偽装された性交行為」であると解釈している[6]。この解釈があまりに精神分析学的にすぎるとしても、どの読者もこの夢に性的な意味合いを認めないわけにはいかないだろう。夢というものが、しばしば日常の意識レヴェルにおいて抑圧されている無意識の欲望が顕在化したものであるとするならば、この夢は少なくとも雄狐とのさらに進んだ関係を望むマーチ自身の欲望が具体的な形を取って現われたものであることは間違いない。そしてその関係が男性と女性の性的な交渉を示唆するものであってみれば、この夢にマーチ自身の男性性から女性性への回帰願望を読み取ってもいいだろう。

この夢のなかの経験は、翌朝にはもう「遠い記憶」になってしまうのだが、雄狐との関係が深化した分、マーチの心はより強くヘンリーの支配を受けていく。彼の軍服の「カーキ色のきらめき」に「夢のなかの狐の輝き」を思い

起したり、また、彼の眼の「見透かすような閃き」が「狐の黒い瞳」と同様、「自分の魂のなかに入り込んでくる」ように感じるのは、彼女の無意識のなかで狐とヘンリーとの置換が進行していることの証拠だろう。したがって、執拗なヘンリーの求婚を受けて、彼女が言葉ではそれを拒んでいても、結局は「彼の力の支配下」に陥ってしまうのも無理はない。しかしこのマーチとヘンリーの関係が進展していく経緯においても、見過ごしてはならないのは、実際にマーチがヘンリーを狐と間違える事実が示すように、あくまでも彼女の意識下における雄狐とヘンリーとの同一化が前提になっている点である。つまり、覚醒したマーチの女性性が男性との結びつきを求めていても、その男性は文字通りヘンリーその人ではなく、雄狐とヘンリーによって喚起された幻想の男性なるものとでも言うべき存在に留まっているということである。

ヘンリーによる雄狐殺しは、言うまでもなく、彼が雄狐に取って代るという象徴的な意義をもつが、作者＝語り手はその場面で、ヘンリーの狐に対する深い同情あるいは共感を表現することによって、狐＝ヘンリーの存在意義を明確に提示しようとしている。

> 森の端のオークの木々の下に立っていると、近くの丘の上の田舎家から突然びっくりしたような犬の鋭い鳴き声が聞こえ、それに応えて辺りの農場からも目を覚まされた何匹もの犬の吠える声が聞こえてきた。[ヘンリー] は急に、イングランドがちっぽけで窮屈なところに思え、その風景が暗闇のなかでさえ縮んでいるように感じた。あまりにも多くの犬が喧しく吠えたて、まるで音の柵を作っている――イングランド中に張り巡らされた生け垣のネットワークが眺めに網の目を作っているのと同じように。彼は狐に勝ち目はないと思った。なぜなら、そもそもこのような喧騒を引き起こしたのは狐に違いないからだ。
>
> ……彼は狐がやってくるのは分かっていた。彼には、その狐が、この数え切れないちっぽけな家々でいっぱいの喧しく犬の吠えたてるイ

ングランドでは、狐族の最後の狐になってしまうだろうと思えてくるのだった。

ここで、別の箇所で「[ヘンリー] は魂において狩人だった。農夫でも、連隊にはめ込まれた兵士でもなかった。」と書かれていること、また、彼がブリテン島の僻地コーンウォールで生まれ育ち、ベイリー農場で祖父と暮らすようになりながら――このことが彼がバンフォードとマーチのもとを訪ずれた理由になっている――、１５歳でカナダに出奔し、そこで入隊して、大戦の激戦地ギリシャのサロニカからフランスを経て、今はソールズベリ平原の駐屯地に配属されているという経歴の持ち主であることを考慮すれば、ヘンリーが、同じいわば放浪の「狩人」として、己れ自身の運命を「窮屈な」イングランドでますます居場所を失くしていく野性の狐の運命に重ね合わせたとしても、それほど不自然なことではないだろう。したがって、このテクストにおいてヘンリー＝雄狐が担っているキャラクターとしての積極的な役割を、H・M・ダレスキーの言うように、「窮屈なイングランドにおいてもはやその存在の余地を残されていないように思われる野性の情熱的な魂の代表者」[7] と解するべきなのかもしれない。

しかし、ヘンリー＝雄狐がそのようなポジティヴな存在意義を担わせられているとしても、それはあくまでも彼らの一側面であり、テクストは他方において彼らの「略奪者」としての側面も明確に提示しているのである。かりに農場の家禽を略奪するという狐の略奪行為が「野性の情熱的な魂」という言い回しとそれほどの齟齬をきたさなくとも、ヘンリーの示す略奪者的な側面を何ら疑問に付すことなく肯定できるだろうか。このような問いを発せざるを得ないのは、ヘンリーが結婚相手としてマーチを支配していくプロセスが、「狩人」が狙いを定めた「獲物」を仕留めるかたちを取っているからである。そもそも彼がマーチとの結婚を思いつく場面が次のように書かれているのである。

> 彼が家の方へやってくると夕闇が下りてきていて、夕闇とともに１１月末の細かな雨が降ってきた。暖炉の明かりが居間の窓にゆらめいているのが彼の目に入った。……ふと彼はひそかに思った、この場所を自分のものにするというのも悪くない。すると、ある考えが抜け目なく彼のなかに入り込んだ、マーチと結婚すればいいじゃないか？彼は死んだ兎をぶらさげたまま、その考えに捉われて、しばらく牧草地の真ん中で佇んでいた。

ヘンリーをあくまでも「素朴な自然の知恵」の代表者と見做すＦ・Ｒ・リーヴィスは、あえてこの箇所を引用して、「しかし実際には、彼の態度に欲得ずくのところはまったくない」と述べているが[8]、リーヴイスの言う「青年の愛」を盲信でもしないかぎり、到底その見解を受け容れることは不可能だろう。上の引用直後のパラグラフのなかで、「彼が彼女を捕らえるには、狩猟に出かけたときに鹿や山鳴を捕らえるようにしなければならないだろう。」と書かれ、また、先に言及した「彼は魂において狩人だった。……」という文に続けて、「そして彼がマーチを獲物として仕留め、自分の妻にしたいと思うのは、若き狩人としてであった。」と書いてあることを考えれば、テクストはむしろヘンリーの略奪者としての面を強調していると言ったほうがよいように思われる。マーチが「野兎」に喩えられたり、ヘンリーがマーチとの結婚を口にした瞬間のバンフォードが「撃たれた小鳥」と表現されているのは、ヘンリーとベイリー農場の二人の女性との関係が狩人と獲物との関係にほかならないことの証左だろう。この観点からすれば、上の引用文のなかで、ヘンリーが自分の仕留めた「死んだ兎」を手にしたまま、マーチとの結婚という考えに捉われている様子は、きわめて暗示に富むものと言わなければならない。

ヘンリーを略奪者と見る観点に立てば、彼からマーチとの結婚の決意を聞かされたバンフォードが、悪し様にヘンリーをののしり、必死になってマーチに翻意を促そうとする言葉も、単なる嫉妬の表われとして片付けるわけに

はいかない。嫉妬によってほとばしり出たと言うべき彼女の本音は、ヘンリーの一面を的確に指摘した、少なくともある程度の妥当性をもつ言葉と考えるべきだろう[9]。

「……汚らわしい労働者。ああ、彼を泊めるなんて、私たちはほんとに間違ったことをしてしまったわ。私たち自身の身分を下げるなんて絶対するべきじゃなかった。私はこの辺の人たちとあんなに闘ってきたというのに、あの人たちのレヴェルに落とされないように。……ああ、ネリー、彼はあなたを軽蔑するわ、ぞっとする卑しい獣なんだから、あなたが譲歩したりしたら、彼はあなたを軽蔑するわ。私は彼を信用しない、猫に物を盗むなと言っても信用できないのと同じよ。彼は腹黒いのよ、腹黒い奴よ、それに横柄だし、どこからどこまでも利己的で、氷のように冷たい。彼の望みはあなたを利用することだけよ。それであなたが彼の役に立たなくなったら、そのとき私があなたを哀れむんだわ。」

この引用で注目しないわけにはいかないのは、このバンフォードの言葉が階級意識を剥出しにしたものになっている点である。ここでテクストの冒頭部分に、そもそも彼女とマーチがベイリー農場に住むようになった事情について、「彼女が主な出資者だった。マーチにはほとんどいやまったく金が無かった。バンフォードの父親がイズリングトンの商人で、娘に切っ掛けを与えてやったのだった。それは娘の健康のためを思ったからであり、また娘を愛していたからでもあるが、また娘が結婚するようにも見えなかったからでもあった。」と記されていることを思い起すべきだろう。この文章はバンフォードにはかなりの資力のある家族が存在していることを明らかにしているが、その事実は、いっさい家族への言及のないマーチやまるで放浪者のような生き方をしているヘンリーと著しい対照をなしている。バンフォードが、突然訪ねてきたヘンリーを最初は警戒しながらも、彼の滞在を許すのは、

「『私の弟が数日ここに居るようなものだわ。弟はあなたみたいな青年なの。』」という言葉が示すように、彼女が彼を自分の家族の一員と見做すことにしたからである。語り手はこのバンフォードの性質を「温かい寛大な心の持ち主」と表現しているが、マーチとヘンリーが互いに惹かれているのに気づくと、苛立ちをあらわにするようになり、二人の結婚の計画を知るに至ってからは、ヘンリーを「浮浪者かその類の下層の侵入者」としか思えなくなり、彼を一刻も早く農場から追い出そうとするのである。

このバンフォードのキャラクターとしての役割にテクストが与えている意義は言うまでもないだろう。彼女は先の引用にある表現を借りれば、「イングランド中に張り巡らされた生け垣のネットワーク」の内部の存在、「喧しく犬の吠えたてるイングランド」社会を代表する人物なのである。ヘンリーを罵倒する彼女の言葉のひとつに、「バージス夫人が彼がここにいた当時の彼のことを知ってたわ。お祖父さんが何でもいいから彼にちゃんとした仕事をさせようとしても、どうすることもできなかったんですって。今の彼と同じで、折さえあれば鉄砲もって出かけていたそうよ。」というのがあるが、まさに因習的な社会の一員ならではの発言と言うべきである。

しかし、だからといって、ヘンリーの存在意義を、マーチをバンフォードとの不毛の生活、あるいは「窮屈なイングランド」から「救い出す」点に求める、言い換えれば、略奪者としてのヘンリーに積極的な意味を見いだそうとする種類の解釈は、『狐』という複雑なテクストを単一的な意味に還元してしまうことにしかならないだろう。確かに、ヘンリーがベイリー農場を出ていく前夜のマーチの心の様子について、作者＝語り手は次のように書いている。

> もうすでに彼と結婚していて、何もかも終わっていたらいいのにと彼女は思った。というのも、突然、彼と一緒にいるととても安心できるように感じられたからだった。彼がいると、実に不思議に、安心で安らかな気持ちになれた。ジルと一緒にではなくて、彼の保護のもとで

眠ることさえできたら。彼女はジルは恐いと感じた。ぼんやりとした優しい状態にある彼女には、ジルと一緒に部屋を出ていって彼女と一緒に眠らなければならないのは苦痛だった。彼女はこの若者に自分を救ってほしいと思った。

この一節は明らかに「救い」を求めているマーチを指し示している。その点に関して、疑問を差し挟む余地はない。そして『狐』の主題をマーチの救済という一点にしぼって考えるなら、ヘンリーが自らの運命を重ね合わせた雄狐を撃ち殺した夜、すなわち彼が雄狐に取って代わった夜に、その死体を見せられたマーチが見る「もう一つの夢」が、「バンフォードとのまったく女性だけの『死んだような』生活からひたすら逃げ出したいという彼女の願望」を表わしていると解釈することも可能だろう。フロイトに従えば、「悪夢のなかの恐ろしい要素はそれを見る人自身の最も暗い秘密の欲望である」のだから[10]。

その夜、マーチはもう一つの夢を見た。バンフォードが死んで、自分が泣きじゃくっている夢だった。彼女はバンフォードを棺に納めなければならなかった。その棺はざらざらの木箱で、中にたたき切った焚き木が入っていて、台所の暖炉のそばにあった。それが棺で、他にはなかった。マーチは苦痛と茫然とした困惑のうちに、箱の内側に敷くもの、箱を柔らかくするもの、可哀相に死んでしまった最愛の人を包むものを探した。白い薄い夜着のままの彼女をぞっとする木箱のなかに横たえることなどできなかったから。それで必死に探しまわった……が、間に合いそうなもので見つけることができたのは、狐の毛皮だけだった。これはふさわしいものではない、こんなものを手にすべきではないとは分かっていた。しかし、それしか見つけることができなかった。それで彼女は狐の尻尾をたたんで、その上に愛しいジルの頭をのせ、その身体を狐の毛皮でくるむようにした。……彼女は声を

あげて泣き続けた。目が覚めたときも涙が顔を伝って流れ落ちていた。

現実にバンフォードが死んでしまう後の場面で、その死因となるヘンリーが切り倒す樅の木が、「焚き木」にするためにマーチがその幹に斧を入れていた枯木であることを知るとき、当然、読者はこの夢のなかのバンフォードの棺のことを思い合せるだろう。そしてまた、彼女の死体を包むのが、他ならぬヘンリーの殺したあの雄狐の毛皮であることを考慮すれば、作者＝語り手の作為はあまりにも明白であると言わねばならない。すなわち、ヘンリーによるバンフォードの死に関して、マーチは「無意識の共謀関係」[11]にあるということである。

『狐』を一編の優れた「愛の研究」として読むリーヴィスは、ヘンリーとマーチの結婚を、「一人の男と一人の女が惹かれ合う、そこに互いの深い欲求が表わされ、一つの永遠の結びつきというかたちに、互いが惹かれ合うことの意味が見出だされる」、そういう意義をもつ作品としてきわめて肯定的に評価し、ヘンリーが二人の結婚を阻もうとするバンフォードを殺害してしまう行為をも、「[マーチ] の夢が認めるように、彼女の最も深い欲求が要求する結末は、彼女の友にとって死でなければならないのである。ヘンリーはバンフォードの死を意志しなければならないのである。」、と積極的に意味づけている[12]。このリーヴィス的な観点に立てば、確かに、ヘンリーの確信に満ちた行為はそのすべてが、「決断のできない」マーチを「救い出すため」のものであると言えるかもしれない。

しかし、筆者はこの「決断のできない」マーチに注目したいと思う。というのも、ヘンリーが農場を去ってしまったあと、「彼女が思い出すことができるのは、笑ったときに彼が、まるで子犬が戯れて唸るときそうするように、急に鼻に皺を寄せることぐらいだった。彼について、彼自身のことについて、彼が何者であるかについて、——彼女は何も知らなかった、彼女が何も知らないまま彼は去っていった。」、とテクストがことさらにマーチにとってのヘンリーの存在の希薄さを強調している点を見過ごすことができないからであ

る。これはヘンリーがまだマーチにとって、覚醒した彼女の女性性がその幻想において求める男性のひとつの表われとしての存在のレヴェルに留まっているということを意味しないだろうか。そうでなければ、ヘンリーが彼女のもとを去ってわずか十日足らずで、次のような婚約解消のための詫び状を書いて、バンフォードとの生活に舞い戻ってしまうことの説明がつかないのである。

……あなたがいないと私は自分がひどい愚か者であることが分かります。あなたがいると、あなたは私に物事を実際にあるがままに見えなくさせてしまうようです。あなたは私に物事をすっかり非現実的に見させてしまい、私は何が何だか分からなくなってしまいます。そしてまた再びジルとだけいると、私は正気になって、自分がなんて愚かなまねをしているのかということや、いかにあなたを不当に扱っているかということにも気がつくのです。だって、自分の心で本当にあなたを愛していると感じることができないのに、こんな関係を続けるなんてあなたに対して不当なことに違いありませんから。……私は何を根拠にあなたと結婚しようとしているのか分かりません。……あなたは私にとってまったく見知らぬ人で、また私にはこれからも常にそのような人であるように思えます。……ジルのことを考えると、私にとって彼女はあなたより十倍も現実的な存在です。……私は彼女をよく知っていますし、とても好きな人で、もしも私が彼女の小指でも傷つけるようなことがあったら、私はひどく自分を憎むでしょう。私たちは人生を共にしています。……彼女は繊細な可愛い人、どれほど繊細であるかを知っているのはおそらく私だけでしょう。……私はジルを愛しています。それに彼女は私を安心で健やかな気持ちにしてくれます……あなたとは結婚できません、私には間違ったことだと思えるのですから、そんなことをするつもりはありません。……あなたへの気違いじみたひどい振る舞いに対する私の謝罪を受け入れて頂けるのなら、

例の件はそのままにしておいて下さい。

ジルもぜひ宜しく伝えてくれるようにと言っています。クリスマスの間、彼女の母と父が私たちのところに滞在します。

この手紙の文面に顕著に現われているマーチの分別心に関して、彼女の意識が正常に戻ったことの証しとしてポジティヴな意義を与えるか、あるいは、彼女が自分自身の無意識の願望を抑圧してバンフォードとの不毛の生活、すなわち因習的なイングランド社会の一単位としての農場生活にもどったことを示すものとしてネガティヴに捉えるかでは、『狐』というテクストの解釈が自ずと異なってくることは言うまでもない。しかし、どの読者もマーチがここで示している分別心に積極的な価値を与えることはできないだろう。なぜなら、マーチとバンフォードの生活が互いの人生を豊かにするものではないことは、テクストのはじめの方の部分に、「[二人] はあまりにも自分たち自身を食いものにして生きていかなくてはならないようだった。彼らを支えてくれるものは何もなかった——希望もなかった。」、と明確に記されているからである。また事実、マーチはヘンリーとの結婚後、バンフォードとの生活をふりかえりながら、「彼女はジルが死んでよかったと思った。自分が彼女を幸せにすることは決してできないことが分かっていたからだった。」と考える。したがって、上の手紙の文面はやはり彼女の本意ではないと考えるのが適当だろう。

しかしまた一方、すでに指摘したように、ヘンリーがマーチの覚醒した女性性がその幻想において求める男性のひとつの表われのレヴェルにとどまっている以上、彼女がヘンリーとの結婚を思いとどまろうとするのも至極もっともなことだと言わなければならない。したがって、上の手紙の文面において、マーチの無意識の願望が抑圧されていることは明白であっても、彼女が示している分別心が全面的に否定的な価値しかもたないと決めつけるわけにはいかないだろう。また、先のマーチの「悪夢」にしても、フロイト的な夢解釈に依拠して、それをバンフォードの死を望む彼女の無意識の欲求の屈折

した表現であるとのみ断定しなければならない理由はない。夢のなかで「泣き続け、目覚めたときも涙が顔を伝って流れ落ちる」ほどに激しい彼女の悲しみを、字義どおりに「最愛の人」を失ったための悲しみであると解する余地も残っているのではないだろうか。性差という観点から考えるとき、この夢におけるマーチに、男性性と女性性との狭間で苦しむ彼女自身の性差の揺らぎを読み取ることができるように筆者には思われるのである。(無論、バンフォードに対してはマーチは「男性」であり、ヘンリーに対しては「女性」である。)

マーチにおける性差の揺らぎは、ヘンリーとの結婚後も解消されることはない。それどころか、それは彼との結婚によってよりはっきりと示されることになると言ったほうが適切だろう。二人は「彼の計画していたとおりに」クリスマスに結婚をすませたあと、コーンウォール西部の海岸にある彼の故郷の村へ行く。だが、そこで明らかになるのは、マーチが幸福感を得られないという事実にほかならないのである。

> 彼女は彼のものになり、彼の陰のもとで生活したが、……彼女は幸福ではなかった。彼のもとを離れたくはなかったが、またそれでいて、彼と一緒にいると自由が感じられなかった。……何かが欠けていた。彼女の魂は、新生とともに揺れ動く代わりに、うなだれ、血を流しているようだった、あたかも傷つけられたかのように。

なぜテクストは、雄狐に触発されることによって目覚めたマーチ自身の女性性が到達した情況をこのように提示するのか。それはヘンリーという男性のキャラクターとしての本質が「狩人」の征服欲であるからにほかならないからである。

> 彼は彼女が防御することなく、ただ身を委ねて……彼のなかに沈潜するようになることを欲した。……彼女が彼女自身を彼に委ねて、彼女

> の自立した精神を眠らせてしまうことを欲した。……彼は彼女の意識を奪い去って、彼女をただ自分だけの女にすることを欲した。

しかし、マーチはこのようなヘンリーの欲望に抵抗し続ける――「彼女は疲れ果てていた。眠りたくてたまらないのに、まるで眠ることが死ぬことでもあるかのように睡魔と闘う子供のようだった。」

> 彼女は目覚めたままでいようと思った。物事を知り、考え、判断し、決断しようと思った。自分自身の人生の手綱は自分の両手でつかんでいようと思った。最後まで自立した女性でいようと思った。

ロレンスは『無意識の幻想』のなかで、「男女両性の間にきわめて重大な差異はないなどと言うのは間違いである。あらゆる差異がある。少年のなかのいかなる細胞も男性であり、女のなかのいかなる細胞も女性であって、そうであり続けるに違いないのである。……女は永遠に感情によって生き、男は永遠に生得の目的意識によって生きるのである。」[13] と述べているが、ヘンリーもまたマーチとの関係において、「男女両性の差異の純粋な区別立てを確立すること」[14] が、己れがそしてマーチが「自分自身の生を獲得する」ための必須の条件だと考えている。

> 彼が［自分自身の生］を獲得するのは、彼女が折れて彼のなかで眠るときだろう。そのとき彼は若い男としてまた男性として自分自身の生のすべてを獲得し、彼女は女としてまた女性として自分自身の生のすべてを獲得するだろう。この恐るべき緊張状態はなくなるだろう。彼女はもはや男ではなくなり、男の責務を担う自立した女ではなくなるだろう。いや、彼女自身の魂に対する責務さえ、彼女は彼に委ねなければならないだろう。彼はそのことを知って、あくまでも頑強に彼女に抵抗し、降伏を待つのだった。

この引用が単に一人の登場人物としてのヘンリーの思いを語っているだけではなく、マーチの人生についての真実をも語っているとするならば、彼女のこれまでの生き方、すなわちバンフォードとの生活において意識的に「男の責務」引き受けようとしてきた生き方が、「彼女自身の生を獲得する」ことはまったく逆方向であったことになる。そして『狐』の語り手も、その点に関して同様の裁断を下し――「まことに、彼女なりのささやかなやり方ではあったが、彼女はこの世の幸福に対する自分の責務を感じていた。そしてそのことが彼女の大いなる励みであったのだ……だが、彼女は挫折した。……彼女は自分自身の責任感を満足させることができなかったのだ。」――、さらにヘンリーの視点から、彼女が追求すべき新しい生き方、海底に強く根を張った「海藻」ような「受動的な」生き方を指し示すのである。

> 海の下では［海藻］は地上の強靭な樫の木よりも強くて不滅であり得る。しかし、常に水面下において、水面下においてなのだ。そして彼女は女であるから、そのような存在でなければならないのだ。

そもそも男女の二項対立自体を批判するフェミニズム批評の立場からではなくとも、現代の多くの読者が、このようなヘンリー＝『狐』の語り手の「女性に対する反動的な見方」[15]を肯定的に受け取ることはまずあり得ないだろう。しかし、読者はここでロレンスが、「私は女性参政権論者よりもより良く、女性のために自分がなすべき仕事をするつもりである。」[16]と書き、実際に「女性が個人となり、自己に責任をもち、自ら主導権を握る」[17]小説『虹』を書いた作家でもあることを思い起すべきだろう。そうしたロレンスの意思は『狐』においても、先に引用したマーチの「目覚めたままでいよう……最後まで自立した女性でいよう」とする決意に反映されているのである。つまり、性差の観点から考えた場合、『狐』というテクストの天秤は、多分に『狐』の語り手自身の男性性の主張に傾きながらも、あくまでも眠ろうと

しない、すなわち、ヘンリーの呪縛にあくまで抵抗するマーチを描くことによって、かろうじてそのバランスを保っているのである。この小説の最後の場面が、ヘンリーとマーチの関係を緊張をはらんだ曖昧なかたちのままにして終わっているのは、むしろ当然のことと言うべきだろう。

> しかし、彼女は再び両眼を見開いて言った。
> 「……私には分からない。向こう（カナダ）へ行って、どんなふうになるのか私には分からない。」
> 「ぼくらが早く行くことができさえすれば！」、とその声に苦痛をにじませて彼は言った。

＊『狐』のテクストは D.H.Lawrence, *The Fox, The Captain's Doll, The Ladybird,* ed. Dieter Mehl (Cambridge: Cambridge University Press, 1992) を用いた。

Notes

1) 富山太佳夫、「解説 なぜ複数の解釈が存在するのか」、『D.H.ロレンス「狐」とテクスト』 富山太佳夫/立石弘道編 (国書刊行会、1994)、p.8.; Claude Sinzelle, 'Skinning the Fox: a Masochist's Delight', in *D.H.Lawwrence in the Modern World,* ed. Peter Preston and Peter Hoare (London: Macmillan,1989), p.161.
2) 多種多様な解釈については、『D.H.ロレンス「狐」とテクスト』を参照のこと。
3) この殺害行為—ヘンリーが切り倒す木によってバンフォードの死がもたらされること—について、John Bailey は明敏に次のようにコメントしている:'If the hero of "The Fox" were a real murderer, who had engineered the girl's death deliberately to make it look like an accident, the story woul have no significance. The point is that Henry is a murderer, in his own mind and desires, ...' John Bailey, *The Short Story: Henry James to Elizabeth Bowen* (Brighton, Sussex: The Harvester Press, 1988), p.125.

4) 『D.H.ロレンス「狐」とテクスト』、pp.151-152.; p.200.

5) F.R.Leavis, *D.H.Lawrence:Novelist* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1964), pp.269-270.

6) Louis Greiff, 'Bittersweet Dreaming in Lawrence's *The Fox*: A Freudian Perspective', in *D.H.Lawrence: Critical Assessments,* Volume III, The Fiction (II), ed. David Ellis and Ornella De Zordo (Mountfield, near Robertsbridge, East Sussex: Helm Information Ltd., 1992), p.302.

7) H.M.Daleski, 'Aphrodite of the Foam and The Ladybird Tales', in *D.H.Lawrence: A Critical Study of the Major Novels and Other Writings,* ed. A.H.Gomme (Brighton, Sussex:The Harvester Press,1978), p.153.

8) Leavis, p.272.

9) R.P.Draper はバンフォードのヘンリー評について、'Something of what Banford says sticks. Henry is, after all, willful and bullying, and the fact that Lawrence is honest enough to present him so is an important piece of authorial self-criticism.'と述べている。R.P.Draper, 'The Defeat of Feminism: D.H.Lawrence's *The Fox* and "The Woman Who Rode Away", in *Critical Essays on D.H.Lawrence,* ed. Dennis Jackson and Fleda Brown Jackson (Boston, Massachusetts: G.K.Hall & Co., 1988), p.164.

10) Greiff, p.303.

11) Daleski, p.153.

12) Leavis, p.275.

13) D.H.Lawrence, *Psychoanalysis and the Unconscious & Fantasia of the Unconscious* (New York: The Viking Press, 1960), p.137.

14) Linda Ruth Williams, *D.H.Lawrence* (Plymouth: Northcote House, 1997), p.79.

15) Draper, p.159.

16) *The Letters of D.H.Lawrence, Volume I September 1901-May 1913*, ed. James T.Boulton (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), p.490.

17) *The Letters of D.H.Lawrence, Volume II June 1913-October 1916*, ed. George J. Zytaruk and James T. Boulton (Cambridge: Cambridge University, Press, 1981), P.165.